

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー ラジオを楽しむ！ 山形開催
- 公開セミナー 第40回名作の舞台裏「外科医・有森冴子」
- 公開セミナー 制作者に聞く！「ぶらぶら美術・博物館」
- 阪神・淡路大震災上映会、サテライト・ライブラリー&教育利用
- 平成28年度事業計画・収支予算を決定

公開セミナー ラジオを楽しむ！ 山形開催



1月16日、公開セミナー「ラジオを楽しむ！」～ラジオの力、音楽の力～を、山形市の遊学館ホールで開催した。「ラジオを楽しむ！」は、

横浜、東京、名古屋、大阪に続いて、5回目の開催となる。今回は、2014年と15年に放送され、ギャラクシー賞、放送文化基金賞、民間放送連盟賞など各賞を受賞した、山形放送の2番組を取り上げた。音楽とドキュメンタリーを見事に融合させた両番組に、会場に集まった220名を超える参加者が、熱心に耳を傾けた。

[登壇者] 伊藤和幸(山形放送)、鈴木啓祐(山形放送)

[司会] 石井 彰(放送作家)

[鑑賞作品]

花は咲けども ある農村フォークグループの40年

(2014.5.31放送/49分)

原発事故を風化させてはならないと山形県のフォークグループ「影法師」が震災から2年後に発表した『花は咲けども』を通して“東北と中央の理不尽な関係”を浮き彫りにし、歌に込めた想いを伝えた。

番組鑑賞後「影法師」の生演奏。結成40周年を迎えた影法師が、想いを込めた歌を熱唱した。



未完の五線紙 戦没作曲家・紺野陽吉が託した音楽

(2015.5.30放送/50分)

山形県白鷹町で町内出身の青年の曲が山形弦楽四重奏団の演奏で初演された。20年前、発見された楽譜。青年が何を願い、出征直前に楽譜を託したのか。数少ない証言と記録を基に取材を続け、戦争を今に伝える大切さを訴えた。



番組を作ろうと思ったきっかけについて、伊藤氏は「以前より山形放送の番組で取材させて頂いていた影法師に、久しぶりに連絡を取ったら、ちょうど『花は咲けども』という曲を作っていた。NHKの『花は咲く』という曲はよく知っていたので、『花は咲けども』というタイトルに、反骨の農村バンドが動き出したなどピンときた」と振り返り、鈴木氏は「新聞で取り上げられた戦没作曲家に非常に興味を持ち、実際にその曲を聴いたら、親しみを感じ、メロディーが頭に残った。また、20年前に楽譜を発見し埋もれないように尽力してきた東京の音楽評論家の小宮多美江さんのお話に惹かれた」と語った。

良い作品には、素敵な出会いがある。伊藤氏は、影法師が福島の前で『花は咲けども』をまだ歌った事がなかったため、番組の中で、被災者の方に聴いて貰いたいと思い、山形市内の避難者支援センターに行った。「そこで、ぱっと目があったのが鈴木マサ子さん。非常に厳しい現実を歌っている歌なので、どう聴いて貰おうか緊張したが、鈴木さんがぜひ聴いてみたいと言ってくださった」と振り返ると、セミナー会場に来られた鈴木マサ子さんから「歌を聞いて、涙が止まらなかった。本当にありがたいと思っています」との言葉を頂いた。伊藤氏は「福島の現実を忘れて欲しくない皆さん思っている。だからこそ、この『花は咲けども』という歌を自分の事のように捉えて頂けた」と続けた。

一方、鈴木氏は、紺野陽吉を知る90代の看護師・金田ようさんとの出会いがあった。「陽吉を知る人は、ほとんど100歳前後になられている。取材の大変さに戦後70年を感じた。陽吉は、戦争に行く直前までは普通の夢を見る青年だった。昔も、今もそういう人はいっぱいいる。だから戦争で亡くなった事はとても残念だと思う」と語った。





石井氏が「地元の人たちに向けて、地域の中で埋もれたエピソード、心に残る物や事を見つけて番組にしていく放送局がある。それが放送で流れると皆さんの心に何かが残る。小さな小石を水溜りに投げると少しずつ波紋が広がっていくように広がっていく。紺野陽吉さんという人に光があたり、影法師の歌があちこちで歌われていく。そういう音楽ならではの力がありますよね？」と問いかけると、伊藤氏が「まさに今回の番組は、音楽の力、影法師の歌に助けられた」と応え、鈴木氏が「小宮さんが、映像や絵は瞼を閉じる

と見えなくなるが、音楽や音は耳から常に入ってきている。音楽というのは自然と耳から入って心に届くのだとおっしゃった。今回の陽吉の曲もそのように心に届き、番組を作るという事にまで繋がった」と語った。伊藤氏と鈴木氏は、これからも地元に向き合い、地方創成や戦争をテーマに番組を作り続けるという。

会場の参加者からは「影法師の歌に感動した」「ラジオの音から場面を想像出来て、とても良かった」「山形のラジオの素晴らしさを再認識した」「より多くの場所・機会でもラジオの魅力を伝えていって欲しい」「ラジオは心を揺さぶる感動の力があると思う。久し振りに涙を流した」「丁寧に向き合って作られた温もりを感じる作品に感銘を受けた」など多くの温かい感想が寄せられた。

■公開セミナー 第40回名作の舞台裏「外科医・有森冴子」

1月23日、制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」が開催された。今回は、1990年4月に放送されたドラマ『外科医・有森冴子（日本テレビ）』を取り上げた。都会の大病院に勤務する女医を主人公に、医師や看護師、患者たちの愛や葛藤などの人間ドラマをヒューマンタッチで描いたシリーズ。トレンドイドラマ全盛期に、人間の生き方や医療の在り方といった社会的テーマに取り組み好評を博した。

[登壇者] 三田佳子（出演） 井沢 満（脚本）

石橋 冠（演出） 川原康彦（制作）

[司 会] 渡辺勉史（放送人の会）



作品を見返すのはオンエア以来26年ぶりという登壇者たち。川原氏は「多忙を極めていた三田さんのスケジュールが偶然空いたので、以前から脚本に感銘を受けていた井沢さんに書いていただいた」と振り返る。三田さんは、大河ドラマ『いのち』や、映画『男はつらいよ』で女医を演じていたが、今回はメスを握る外科医。「有森冴子」というキャラクターを作りあげるに当たっては、85年に男女雇用機会均等法が制定され、「これからは女性の時代」という世間のムードを背景に、「一番とんがった女性」を描きたいという意識があったという。三田さんとスタッフは実際に病院を見学し、多くの医師と会った。白衣の前をはだけて歩いている、聴診器は二つに折って首にかける、手術を終えたとほっとして煙草を吸う…といった細かい身なりや行動も、現場の医師たちを見て初めて分かった。石橋氏は「ピカピカの白衣は嫌だと、わざと皺を作ったり、胸ポケットのペンなどの小道具も全部三田さんが決めた。打ち込み方には鬼気迫るものがあり、時々おっかなかった」と笑った。毎回医師が監修に立ち会った手術シーンでは、シリーズ終盤になると三田さんの手さばきもプロ並みになり、若い研修医が「お手本にしたい」と拍手

するほど上達したという。そうだった細部の追求がドラマのリアリティを増したと言えるだろう。

『外科医・有森冴子』というタイトルも当時は珍しかった。「最初は、夢に出てきた『外科医・有森逸子』を提案した。でも石橋さんが『逸脱の逸だから逸子は嫌だ』と。僕は内心『秀逸の逸だよ』と思ったんだけど」と井沢氏が言うと、石橋氏は「全く覚えていない」と頭をかきつつ、「メスを連想させる『冴子』で結果的に良かった」と皆領いた。有森冴子がヘリコプターで病院に到着する印象的な登場シーンは「あれは川原プロデューサーの大英断でしたね（三田さん）」「皆反対すると思っていたのに、誰も反対しないんだもの（川原氏）」と笑いの渦に。「舞台のように、長い前振りの後によく主役登場!というのをテレビでやりたかった」と言う井沢氏に、川原氏は「一外科医が赴任するのにヘリで来るかと普通は思うが、“道路は交通事故で通行止め”という状況を設定している。よく考えられた脚本だと思った」と懐かしんだ。

第1話では、有森冴子の離婚した元夫が、現在の妻と共に患者として現れる。末期ガンに冒された夫を巡り、妻と主治医である有森冴子が長い台詞を交わすシーンは、石橋氏は「逆上した妻の攻撃的な物言いを三田さんがクールにかわっていく、抑えた演技が絶妙だった。最初、あのシーンは台詞だけで少し長いと思っていたが、細かくカット割りできないくらい三田さんが良かった」と振り返った。井沢氏によると『ドラマとは対立化と非日常』。一人の男性を挟んだ「元妻」と「現在の妻」、その元夫を元妻が執刀するというこの第1話は、見事に『対立化と非日常』が描かれている。

また石橋氏は「有森先生が、世界の飢餓や核の問題に触



れながら、『自分があと20年外科医を続ける間に、手掛けられる患者の数は千人にも満たない。一人一人と大切に向き合うことが務め』と言う。今、観客として見ていて、心にぐさっと刺さる台詞だ」と指摘した。社会問題から“医者としてのあるべき姿”へとつながっていく、非常に力強いメッセージが伝わってくる。オンエア当時がバブル期だったことを考えると、よりその重みを感じられる。

「ロケ帰り、東京駅で急病人を見た時に、咄嗟に有森先生になって駆け寄り、脈や呼吸を確認しながら『大丈夫ですよ。今、救急車が来ますからね』と声をかけてしまい、我

に返った」というほど役にのめり込んでいた三田さん。今でも「あの番組を見て医者になった」という医師のグループから講演の依頼が来るという。当日の会場にも「子供の頃にこの番組を見て医療の道を志し、現在は医師や看護師として働いている」という参加者が何人も参加していた。視聴者の人生を方向づけた26年前の名作に、会場からは大きな拍手が送られた。



■公開セミナー 制作者に聞く! 「ぶらぶら美術・博物館」

1月30日、番組制作スタッフや関係者から、放送現場の“今”を伝える公開セミナー「制作者に聞く!」を開催。今回は、昨年12月に「BSデジタル放送開始15周年」を迎えたことから、BS日テレの人気番組『ぶらぶら美術・博物館』を取り上げた。

[登壇者] 山田五郎(評論家) 藤好 耕(演出/東映企画)
佐藤明香(プロデューサー/BS日テレ)
[司 会] ペリー萩野(コラムニスト)

初めに藤好氏から、当初は日本テレビの朝の番組で生まれた「美術展を生中継する」という画期的な企画であり、



その後、BS日テレの1時間番組としてスタートしたという成り立ちが説明された。佐藤氏は「美術とは有難く扱わなければいけないもの」という先入観があったが、山田氏による「イキイキした平易な言葉での解説」を体感して解放されたという。山田氏は「学芸員の解説が難しい言葉になった場合、どうフォローするかを考えている」と語った。

キャスティングに関して藤好氏は「美術に詳しい人と一緒に行ったら楽しいし、綺麗な女性と一緒にいったらもっと楽しい(笑)。そういう構成で五郎さんと高橋マリ子さんになっている。また名画を前にしても価値が分からないこともある。そんな自分の代弁者とも言えるのが、おぎやはぎの二人」と明かした。佐藤氏は「視聴者は、誰かに自分を投影してご覧になっているのでは?」と語った。

事前準備では、ディレクターによって丹念な台本が作られていることが明かされた。しかし佐藤氏は「台本はあくまでアウトライン。五郎さん率いるチームで血肉化する。おぎやはぎさんとマリ子さんにはあえて読まないでらう。



その結果、温度のあるものが現場で生まれる」と説明した。

取材について山田氏は、以前に比べ美術館の敷居の高さを感じる事が少なくなったという。ペリー氏が「全国各地の学芸員の間で噂が広がり、間口も広がっているのでは?」と問うと、山田氏が「そこが全国で見られるBSならではの強み」と指摘した。



編集について、藤好氏が「2~3時間の素材を45分に詰める。会話の『あー』とか『えー』等を切るだけでも10分位縮まる。音声だけの編集が400~500箇所」と、その技巧を明かすと、会場からは溜息が漏れた。

山田氏は「美術は勉強しなくてはいけないとか、格式を重んじなければいけないといった印象が強いが、基本は楽しむためのもの。作品の良し悪しだと教養的な話になるし格好つけようとする(笑)。一番良い鑑賞法は、どれが好きかではなく、一点貫えると言われたらどれが欲しいかで楽しむこと」と「美術鑑賞のコツ」を語った。続いて佐藤氏は「視聴者からは『おぎやはぎさんの言葉に勇気づけられた』という感想を多く頂く。美術は自由に感じ、楽しんで良いもの。二人の素直なものの方が、皆さんの背中を後押しするのであれば嬉しい」と語った。そして藤好氏が「『地方在住で東京の美術展に行けないので、番組が有難い』というメールを頂く。それが本当に嬉しい。続けられるのも皆さんのお蔭。改めてお礼を言いたい」と締め括ると、会場からは大きな拍手が起こった。当日は熱心な番組のファンが多数詰めかけ、終始笑いの絶えない和やかな雰囲気でのセミナーとなった。



■テレビとラジオが伝えた阪神・淡路大震災 放送ライブラリーの番組を視聴する会

発生から21年目となる阪神・淡路大震災に関連した番組を視聴する会を、1月15日～17日の3日間、情報文化センター7階の大会議室で実施した。

今回は、関西の放送局やテレビ神奈川が制作したドキュメンタリー、ドラマなど、ラジオ番組2本を含む7本の番組を取り上げた。参加者からは、震災の教訓を忘れないためにも毎年実施してほしい、ドラマを紹介していた点がよかったなどの声が寄せられた。来場者数は、のべ313人。



■公開セミナー&企画展、親子出前授業

・被災地から明日へ～東日本大震災・福島原発事故を忘れない!～

「公開セミナー 制作者に聞く!～番組制作の現場から～」は3月18日(金)に被災地・宮城県仙台市のせんたいメディアテークで好評裡に開催された。

・ウルトラマン 時を超える珠玉のストーリー展 ～未来へ繋ぐメッセージ～

2月19日(金)～4月3日(日)まで放送ライブラリーのイベントホール・映像ホール・情報サロンで開催され、多くの来場者で賑わった。

・出前授業@テレ朝 親子出前授業

3月30日(水)に情報文化センター6階の情文ホールで、「天気予報」をテーマに開催され、多くの小中学生とその保護者が来場した。

■サテライト・ライブラリー&教育利用

・諫早市立諫早図書館

8月21日から2月21日まで、諫早市立諫早図書館のふるさと文人コーナーに用意した視聴用パソコン3台を使い、同市出身の脚本家・市川森一が手がけたテレビドラマ16本を個別視聴できるようにした。利用者数は、のべ190人。

・広島平和記念資料館

9月1日から2月29日まで、広島平和記念資料館の情報資料室に用意したパソコン2台を使い、原爆関連のテレビ番組8本を個別視聴できるようにした。利用者数は、のべ55人。

・市川市文学ミュージアム

2月2日から11日まで、市川市文学ミュージアム内のベルホール(定員46席)を会場に、同館が2月14日まで開催していた企画展「山田洋次×井上ひさし展」の関連イベントとして、山田洋次氏にちなんでテレビ番組2本を上映した。来場者数は、のべ274人。

・長崎県立大学

27年度後期、情報メディア学科「映像研究」(村上雅通教授)の授業に、民放局が制作したテレビ番組3本が利用された。受講生数は35名。

・早稲田大学

27年度後期、教育学部「広報関係論II」(伊藤守教授)の授業に、NHKが制作したテレビ番組5本が利用された。受講生数は68名(写真は早稲田大学の授業の様子)。



■平成28年度事業計画・収支予算を決定

2月26日開催の第2回理事会で、平成28年度事業計画・収支予算が承認された。平成28年度事業計画の概要は、次の通りである。

[平成28年度事業・財政計画]

平成28年度は、「向こう5年間の事業方針」を遂行する4年目にあたり、これまでの成果を踏まえ、事業のさらなる充実を目指す。番組の収集・保存・公開に関しては、外部の専門会社のパワーも導入して権利処理の体制強化を図り、公開番組数の増加につなげる。事業の全国展開は、全国展開推進部会の答申を踏まえ、公共施設へのサテライト・ライブラリーの展開と大学の講義における公開番組の利活用の拡大に一層力を入れる。上映会、公開セミナー、企画展などにおいて公開番組を積極的に活用して視聴機会を増やし、放送ライブラリーの存在価値をアピールする。

基本財産の運用益は、利率2.3%以上を維持して、2億2,000万円の収益の確保に努めるとともに、民放とNHKに対して24年度比30%減の総額1億6,170万円の出捐を引き続き要請することで、前年度並みの収入を確保し、事業の安定に資する。

30年度から始まる次の5年間を見据えた、次期事業方針

の策定に向けて、検討を開始する。

■第24回放送番組収集諮問委員会を開催

3月10日に第24回(平成27年度)放送番組収集諮問委員会を開催した。同委員会では、番組の収集・保存・公開状況、全国展開推進部会の答申、サテライト・ライブラリー及び大学での利用状況などについて報告した。その後、各委員から多くのご意見、ご提言を頂いた。各委員の意見を踏まえて、吉見委員長からは、特にサテライト・ライブラリーや教育利用の様々な課題にどこまで応えられるのか、ということが番組センターの将来構想にとって大きな課題であり、具体的にロードマップを作成して積極的に進進してほしいとのまとめの発言があった。

■全国展開推進部会の答申

サテライト・ライブラリー、及び大学での教育利用における課題への対策、推進策を検討するために、事業運営委員会の下部機構として全国展開推進部会を設けた。同部会は、上智大学の音教授を部会長として、6名の委員で構成された。昨年9月から本年1月の間、4回の会合をもって諮問事項に関して検討頂き、提言がまとめられ、2月の事業運営委員会に答申された(答申内容は次号掲載)。